いのちを選ぶ

Choosing Life

「出生前診断」ということばを聞いたことがあるだろうか？　胎児の病気や障害の可能性を、お母さんの血液の検査や羊水検査などで探る「診断」である。性別を知るのみならず、病気を早めに診断し、かつ治療できるなら、それに越したことはない。

ところが、二十一世紀の医療では、みなが喜ぶべき生命誕生の現場で、子どもの生死を選ぶように医者から迫られることがある。そうでなくても初産の時には、だれでもとまどうことばかりだ。その時に、神を恐れる者はどのように考え、どのように決断をしたらいいのだろうか。

今回は、医師から初産の子の中絶を勧められながら、それに反して出産を選んだふた組のカップルを紹介したい。

中絶手術の一歩手前で引き返す

医師から中絶を勧められるのは、胎児に異常があるときだけとは限らない。母体の安全のために、減胎手術を勧められることもある。子どもを選ぶのか、自分の安全を選ぶのか？　そのような危機的な状況の一歩手前で引き返して出産を選び、その経験を通して夫婦ともどもイエス・キリストを信じるようになったカップルがいる。

左から輝くん、純子さんのお母さん、純子さん、サラちゃん、基広さん

山口県萩市の藤村基広さん（38、結婚12年目）純子さん（32）である。純子さんは、双子をみごもったとき、かかっていた産婦人科医師から「あなたは身体が小さいから、二人生むのは無理です。だから一人だけにすることを勧めます」と自信たっぷりに言われた。確かに、純子さんは小柄で細身である。双子のうち、妊娠初期は片方がかなり小さかったために「小さいほうは無事に産まれても、その子は90％障害を持つでしょう」とも言われた。

当事、信仰に興味を持ちはじめていた純子さんは、そう言われて迷いが生じ、〈その通りだ、自分は身体が小さいから二人生むのも育てるのもむずかしい。教会の人たちには黙っていれば分からないから、お医者さんの言う通りに手術を受けよう。このことは主人にだけ話すことにしよう〉と一人で心に決めていた。

しかし、つわりがひどかったため、病院へ車の送り迎えをしてくれたベス・ギルブレス宣教師に、手術のことを話すと、その時は黙って聞いていた宣教師から、あとで六ページにも及ぶ手紙が届いた。英語がよくわからなかった純子さんは、辞書を引き引き読んだ。

「神さまはあなたが思ってるよりあなたの事を愛しているし、お腹の中の双子の事も愛している。彼らの命を守って、愛して、育てて。殺さないで。私たちに未来は見えないけど、神さまは知っておられるし決して変らない」という内容だった。純子さんは、「私の気持ちも知らないで、勝手なことを言っている」と感じた。一方、夫の基広さんは、手術を受けることについては大変迷っていた。

「ベスはああ言っているけれど、もう決めたことだから」と、福岡にある病院に予約を取り、手術を受けるためにご主人と病院に向かった。

しかし、お医者さんに「これから手術をします。いいですね」と念を押された時に、純子さんはとっさに返事ができなかった。

「99％は決めていたんですが、1％の迷いが出て来ました。それで、『少し時間をください』と先生にお願いしました。三十分の時間をもらって考え、また先生の前に出ましたが、やはり答えは出ませんでした。仮に一時間もらっても、答えは出なかったと思います。

先生に『最後に聞きます。どうしますか？』と聞かれても、やはり答えは出ませんでした。その時、いっしょにいた主人が、いきなり『帰ります』と返事をしました。決められない私に代わって、主人が答えてくれたんです。私も、それがいいと思い、一緒に帰りました」

◀ベス宣教師と純子さん

▼ホーリー・ベル宣教師一家

出がけに考えていたこととは正反対の決心をして帰宅した純子さんだったが、もう迷いはなかった。その日のことをベスたちに告げると、喜んでくれた。

双子を妊娠中の二〇〇四年の十月、純子さんは洗礼を受けることにした。ひどかったつわりもおさまって来た頃だった。ところが、受洗の二日前に、突然お腹の様子がおかしくなり、病院に言ったところ、まだ六ヶ月なのに切迫流産で、このままにしておけば生まれてしまうと言われた。現代の医療でも、こんなに小さくては危ない状態だった。